



イギリス講演旅行報告

東京大学大学院薬学系研究科・講師
A02 生長 幸之助

【はじめに】

2019年10月27日～11月7日の間、本新学術領域のご支援により、イギリス（UK）国内5機関（Imperial College London、Nottingham、Bristol、Glasgow、Manchester）を訪問し、講演する機会を頂いた。海外機関の訪問・講演は、実は全くの始めてではない。数えてみると過去8回ほど実施していた。海外学会への参加ついでに近郊機関1～2箇所にアポをとり、延長滞在して立ち寄ることを毎回意識的に行ってきた結果である。同世代では明らかに経験豊富な部類だろう。こんな人間が Lectureship 賞を活用しても良いのだろうか？とは正直思ったものの、頂けたからには責任をもって、次世代へと貴重な経験を伝えていければと思う。

【海外講演旅行＝自分に喝を入れ、成長する絶好の機会】

国内研究機関で10年近く過ごし「中堅」と呼ばれうる年齢にさしかかってくると、研究業務の多くを"手なり"でこなすことが増えてくる。不遜でいるつもりはないのだが、時間的圧迫を言い訳に「こんなもんでまあ大丈夫だろう」と見切って取り組むケースもある。単調増加を続ける雑務の山に押しつぶされ、創造的思考を生み出すための負荷は少なくなり、プライベートも慌ただしくなってきた、研究にも何となく身が入らない・・・同世代研究者であれば、多少なりとも似た現実には誰しも巻き込まれているのではないだろうか。

そんな終わりなき日常をリセットし、研究者としてさらなる成長を望むには、**コンフォートゾーンからの脱出機会**を意識的に用意せねばならない。「年1回は海外相手に新ネタを披露してやろう！」と自らに課すことは、よいカンフル剤となる。まとまった時間（45-60分）の英語講演機会は、日本国内で過ごす限り相当に限られる。「日本人ですからお互いこれぐらいで・・・」とする忖度まみれの英語に浸るのではなく、容赦ないネイティブ速度の質疑応答に「一言一句聞き逃さない！」との緊張感をもって挑む。日本代表としてのプレッシャーも背負っていけば、プレゼン構成も真剣に練ろうというもの。原稿を一から作って覚えるなど何のその。学生～助教時分に置き忘れがちなまささらなチャレンジ精神も喚起される。そんな状況に強制的に身を置くことは、緩みがちな自らを引き締める契機になる。加えて旅行好きの自分にとっては、海外発表を楽しみに研究することによって、日々のモチベーションアップにつながっていることも疑いない。

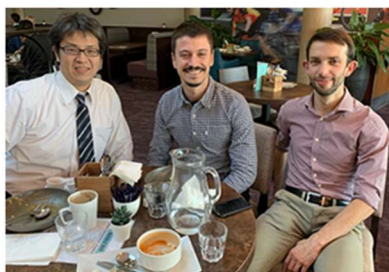
この経験から同世代化学者に「海外講演は素晴らしいよ！」と薦めてみたことは幾度かある。その都度、「ボスの方針のためやり辛い」「授業や雑用があるので抜けられない」「時間的・金銭的余裕もない」「そもそもそんなこと考えもしなかった」という返答を多く聞いてきた。それぞれが事情を抱えることは理解できる一方、どこことなく残念な話にも感じる。本質的に重要なことは、吸収力・エネルギーに富む若い時期の使い方ではないだろうか。経済的理由ならば如何ともしがたいが、国際学会旅費が出るのであれば、「海外学会+1機関訪問」からトライしてみるのはどうだろう。口頭講演に応募したが落とされてしまい、高額な海外出張費を払ったあげく、ポスター発表だけして終わり・・・という経験は誰も持っていないだろうか。研究アピールのコスト対効果を考えると、これは本当に勿体ない研究費の使い方と言わざるを得ない。2～3日程度のスケジュールを追加し、現地機関を訪問して現地化学者と face to face で議論する機会を付帯しておくことには、保険的意味合い以上の価値が生まれるはずだ。



【若手 PI と出会う機会を重視する】

今回の講演旅行では、UK の同年代 PI と話す機会が多くあり、得がたい経験となった。日本人的感觉だと大御所と知り合うほうが良さように思いがちだが、個人的には「これから伸びそうな同世代の若手 PI」と知り合うほうが、投資効果が遥かに高いと確信している。

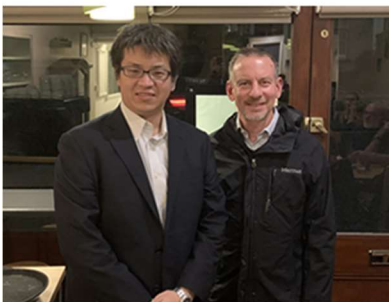
「日本には1度も来たことがない」と語る若手 PI は数多い。駆け上がりフェーズにある彼らは、不慣れなラボマネジメント、グラント申請、学生教育などに忙殺されていることが多い。海外学会へ参加したくとも、十分な成果も時間も旅費も手元にない。子供をもつタイミングの方も多く、そうすると長期間家庭を離れることも難しい——こういう話は、日本の若手であっても想像可能だろう。そんな彼らとは、現地訪問でもしない限り出会うことはまず不可能である。意識的にコネクション作りを試みない限り、そもそもマッチング自体が成立しないと捉えるべきだろう。中堅～大御所 PI はハードルを一つ超えていて余裕があったり、あちこちに招待されていたりするので、出会うことはまだ容易である。ただ有名人であるほど知り合いも多く、一度や二度の顔合わせ程度では特別扱いもされづらい。若手 PI に積極的にアプローチすれば、彼らにも貴重に感じて貰いやすい。彼らがいずれ成功して日本を訪れるときに、窓口自分を選んで貰えるのならば、この上なく素晴らしい話だろう。UK 機関にいるシニア PI もこの事情は良く分かっているようで、来訪者の対話・ホスト機会は、若手 PI へと優先的にアサインする教育的配慮や文化があると感じられた。



@Nottingham
中: Prof. Mattia Silvi
右: Prof. Liam Ball



@Imperial College
右: Prof. Alan Armstrong



@Bristol
右: Prof. Jonathan Clayden



@Manchester
左: Dr. Greg Perry
右: Prof. Daniele Leonori

【おわりに】

小さくとも経験があれば、大きなチャンスに向けて心の準備ができる。今回のように講演のみを目的とした長期出張は自分も初めての経験だった。しかし過去の蓄積があったため、予算内で訪問先を適切に選択したうえでアポをとり、体調も加味した無理のないスケジュールでのアレンジも可能だった。講演とディスカッションに集中でき、この上なく貴重な機会を楽しめた。日頃から海外経験を推奨頂いている金井教授、仕事を分担頂いているラボスタッフ・秘書の方々、不在時にも実験の手を止めていない（と信じている）学生達には、日々感謝が絶えない。

複数機関を短期で効率良く巡るために UK を選んだことは事実であり、おかげ様で素晴らしい化学研究にも沢山触れることができた。詳細に記すには余白が足りないため本稿では割愛するが、字数制限を気にしなくて良いブログで（時間が許せば）その辺りの話を書いてみようと思っている。今風に「**続きは Web で!**」とまとめて筆を置きたいと思う（笑）。

最後に、貴重な機会を与えて頂きました真島先生・野崎先生には改めて感謝申し上げます。